



⑦ 疱瘡祝之帳 おまき

天保六年 (1835) 4月26日

ほうそう てんねんどう
 疱瘡は天然痘とも呼ばれ、高熱が三日ほど続き水疱が顔から全身に広がり、最後は瘡蓋となり、発病後約二週間で全快する伝染病です。死亡する場合もあり、治っても顔に痘痕が残ることが多かったため、江戸時代には大変恐れられていた病でした。このため、江戸時代の人々は子供が疱瘡から全快すると快気祝いを盛大に催しました。この史料は、祝儀として納められた白米や金銭の書き上げ帳です。白米が、金銭と同様に贈答品の代表であったこともわかります。

片山紀道家文書 P9311 No.767
 (高崎市石原町)

【⑦】 疱瘡祝之帳 おまき

〔釈文〕

〔表紙〕

(二八三五)
 天保六年
 疱瘡祝之帳
 未四月廿六日 おまき

一百文 半治郎

拾六文

一白米貳升 藤左衛門

拾六文

一百文 吉祥寺

菓子

一白米壹鉢 藤三郎

菓子

一白米一重 卷太郎

上菓子

一白米壹鉢 億太郎

菓子

(後略)